

### 第3回まちなかのにぎわい創出円卓会議議事録

- 1 開催日時 令和元年5月17日（金）午後1時30分～午後4時
- 2 開催場所 三条市中央公民館 1階 大集会室
- 3 出席委員 川口委員、長野委員、小林委員、長谷川委員、村山（宥）委員、藤井委員、高橋委員、吉田委員、村山（伸）委員、井上委員、松原委員、結城委員  
（欠席：久野委員、水沼委員）
- 4 事務局側出席者  
渡辺理事兼市民部長  
生涯学習課 恋塚課長、笹倉課長補佐、今井主任、澤崎一般任用主事  
地域経営課 新田課長補佐、藤田係長  
商工課 大竹係長、泉田主事  
小中一貫教育推進課 土佐統括指導主事、井口指導主事  
政策推進課 平岡課長、前山係長
- 5 オブザーバー出席 隈研吾建築都市設計事務所 田中設計室長、山崎氏
- 6 傍聴者 なし
- 7 報道機関 新潟日報社三条総局、(株)三條新聞社、(株)越後ジャーナル社
- 8 会議概要

(1) 図書館等複合施設建設基本計画（案）について（追加）

生涯学習課長：資料により説明。

川口委員：基本計画 14 ページのイメージで動線や空間の考え方とか、ここが拠点となってまちなかを歩く機会を増幅していくことなのか。また、遺跡の発掘調査エリアを避けて配置してあるのか、緑の空間の保全を考えているのか、メインの動線をどう考えているのか伺いたい。

生涯学習課長補佐：プロポーザルで示した市の前提条件として、校舎建設地跡に抑えることで提案を受けた。実際には、サイエンスホールの下が少しはみ出る程度である。緑については、できるだけ植栽は残してほしいという地域等の要望があるので、それを示させていただいた。

隈研吾建築都市設計事務所：あくまでも提案時の考え方として、校舎は細長く建設されていた。また、グラウンド側からえんがわ方向を見た時、緑の資源が多く、南北の動線を取った。元々の正門と北三条駅方面の動線も確保した。その他のものについては、前提条件から、駐車場は北側の道路から入るのが安定的であり、鍛冶道場の脇に駐車場を置いた。歩車共存道路は(図の)下や右側に配置している。体育文化会館方面から中央に入ってくる動線も考えてある。施設自体が元々小学校ということで、アクセスしやすい所にあるということで、それぞれの動線をつくることで、快適性を確保することが提案の内容である。

川口委員：校庭の部分は緑で遊ぶ場所というイメージか。

隈研吾建築都市設計事務所：かつての三条小学校の写真を拝見すると、緑が多いというイメージがあり、かつ前提条件として建物を建てることができない場所である。

長谷川委員：歴史民俗産業資料館の資料は鍛冶ミュージアムに移すという考えか。

生涯学習課補佐：鍛冶ミュージアムの想定面積もあるが、全部を移すかどうか、中身を含めて現在検討しているところである。

小林委員：この基本計画は、本日示されたばかりなので議論の余地がない。

長野委員：建物については、地域の年中行事を調査した上で構成を考えてもらいたい。えんがわとマルシェで夏祭りの花火大会をグラウンドで観覧するイベントを考えている。より多くの人がまちなかで花火を見ることができると考えると、図書館とサイエンスホールを逆にするなど設計に反映できないものか。もう一つは、北側駐車場に桜があるが、現在、散歩道が作られており、地域の人から喜ばれている。この桜並木を活かしてもらいたい。

長谷川委員：鍛冶道場からの動線を考えると、この案でよいのではないか。花火見物は新しい図書館の屋上で可能ではないか。

生涯学習課補佐：建物の配置については、文化財埋蔵地の関係で動かすことはできない。基本計画は前回の中間報告を基本としており、追加事項は、これまでの振り返りや隈研吾建築都市設計事務所の提案を加味したものである。御覧いただいて、意見等があれば事務局まで一報をお願いしたい。ワーキングを改めて開催するか否かは検討させていただきたい。

井上委員：図書館はITセンターといった情報に詳しい人がいる感覚がある。若者が多く集まるのは情報が集まる中心地だと思う。ソフトがあってハードが出来ると思うので、何かこれまでの図書館のイメージとは違うものになるのではないか。

生涯学習課補佐：基本計画の中では詳しくは載せていないが、例えば運営体制の中で箱としての図書館ではなく、奉仕についても司書の高いスキルでの情報提供を目指している。

井上委員：図書館は今までの図書館のイメージと違った将来を見据えた情報の拠点となるものが求められると思うので、そこも加味してほしい。

小林委員：理科教育センターはいつから科学教育センターに修正されたのか。

統括指導主事：基本計画の中間報告後に検討を行い、理科という一教科の枠に縛られない、よりふさわしい名称として科学教育センターとして今回示させていただいた。

結城委員：山口県の山口情報芸術センターYCAMも参考にしてほしい。

## (2) まちなかのにぎわい創出に向けた取組について

理事兼市民部長：資料により説明

事務局から、議長は小林委員をお願いしたい旨諮り、全員異議なく了承。

小林委員：1ページから御意見ををお願いしたい。

松原委員：核となる施設を建設し、にぎわいを創出したいということだが、体育文化会館と図書館等複合施設をベースに限定するのか、空き家・空き店舗の活用は考えていないのか。

市民部長：公共施設を中心に魅力を向上させ、多くの方から訪れていただくことを考えている。その特長的なものとして、体育文化会館と図書館等複合施設を核にして取組を進めていきたいとしている。また、公共施設以外のコンテンツの発掘等については、松原委員から指摘をいただいた空き地・空き家・空き店舗の活用を進めていくこととしている。空き家・空き店舗を有効活用していくことで、起業とか若い世代が移り住んでくることなどを含めてコンテンツ磨きや魅力向上に努め、これらを繋いで歩いて回遊するまちづくりとしていきたい。この3本柱で取り組んでいく。

井上委員：同じ人でも、ある場所に住むと健康になるし、その逆もある。これは、都市等に限らず、企業・組織にも言える。まちで言えば、そのまちの特徴で歩く、歩かないということが生まれ、田舎の方に行くと歩くことが少なくなる。このような中で、地方都市で歩く用のない場所でどのように体を動かし健康を維持するのかを研究している。その立場から、にぎわいが日常化しているのか、ということに関心がある。ここでいうまちなかは市街地だと思うが、集まる人の何割が地域の人か、何割は歩いてくるのか、車なのか、車の人は他の場所に移動するのか、あるいは、週何回来るのかを考えたりする。まちなかに来る人は日常の行動であるのか、特別な行動に分かれる。特別な行動で来る人の具体的な動き、様々なパターンがあるので、立体的に考えて対応することだと思う。

松原委員：夜間人口を増やすことを前提として考えていくものと理解している。

村山（伸）委員：基本的に住民にとってのにぎわいだと思っている。それが外から来る人のイメージはあるが、地域生活のための買い物や運動などの場をどう作っていくのかと思っている。まち工場や職人などのコンテンツは、住民が日常的に訪れるとは考えにくく、外部からの来訪者との整理がついていない。

結城委員：前提として、地域の人図書館なのか、外部からの人の図書館なのか、どちらも必要であると思うが、燕三条を感じられるような外部からの来訪で方向性は進んでいたものと認識していた。それは、地域だけが満足出来る図書館であれば、現図書館でも十分であり、様々な空間を作り出し、燕三条の情報を発信していくための施設を作るのであれば、外に向けたものでないと価値を感じない。

長谷川委員：人口は9万7千人に減少している。まちなかには歩いている人はいない。須頃地区にはものづくり系の学校と医療系の学校が出来る。これらの学生をどう呼び込むのか期待している。如何せん、弥彦線の運行頻度が少ないので、JRに依頼してみてもどうか。

長野委員：にぎわいは誰に向けているのか。スマートウエルネスの観点から高齢者なのか、それとも新たに人を呼び込むのか。これは両方推進するべきだと思っている。JRとバス通りの強みがあり、公共交通の利便性がこの地域は高い。この利便性とにぎわいの創出を深く考えながらコンテンツを落とし、一過性のものであるのか否か、外部からの人なのか、地域の人なのかを考えると、先日のイベントでは大型連休で帰省者が多く、歩いて来る方が多かった。普通は外部が7割で、3割は歩いて来る。この図式は変わらないと思うので、駐車場の設定は欠かせない。

工場などの資源の発掘と書いてあるが、この地域に工場は数件しかない。したがって、ものづくり学校のように商業的な生業をしていこうとする方が集える場所がこの近くに存在するので、空き家・空き店舗の活用がにぎわいの創出に繋がるのではないかと考えている。それらが顕在化していくことによって、この複合施設がシンボリックな存在になり、そういった方々が回遊していくのが理想ではないかと感じている。

吉田委員：新図書館と体育文化会館の間に八幡公園があるが、この公園もきれいになるということで、高齢者が一歩外に出るきっかけとしてこのコースも考えてほしい。八幡様の池には親子連れも集まるし、高齢者も集まり会話をする。まず、自分たちが元気にならなくてはいけない。更に、小路も活用すると人の流れも変わると思う。

小林委員：4・5ページについて、意見を伺いたい。

村山(伸)委員：どういう人たちが利用しているのか。年代や子育て世代の利用動向が重要だと考える。

井上委員：まちなかとはどの範囲を指すのか。

市民部長：一口で言うと中心市街地であるが、特長的にまちなかにぎわいをつくっていくエリア設定は公共施設等が集中している北三条駅を背にした300メートル範囲のエリアである。ここでのにぎわいを創出し、旧三条小学校区に波及させていきたい。

井上委員：まちなかの人とか市内の人とかで利用形態が違う想定だと思う。まちなかは近所の人であり、市内の人はまちにあるものを使う。これらの人から来てもらうために求められるものも違ってくると思う。まちなかをどこまでにするということを指標にするのであれば、事業評価に入れてよいと思う。まちなかの人利用とそれ以外利用と分けて考えた方がよい。

藤井委員：市内の人口は9万7千人で、イメージとして小学校単位で見ているのか、町内別で見ているのか、どういったイメージを持って考えているのか。

市民部長：市内とは三条市の傾向であり、三条市全体の状況として押さえている。まちなかの範囲を特定すべきという意見は、調査するまでに設定する。日常的に来る方、非日常的に来る方がいる。まちなかは、旧三条小学校区の人口動態と考えているが、別の意見があれば御指摘いただきたい。

藤井委員：公共交通から言えば、バスは人が住んでいる所で動いていない。逆に、人が動いている所に充てられていない。どこに人が居て、どこに行けるのか、少し細かいところまで見ていかないと、全体はこうですと言われても、有効なまちなかのにぎわいのための公共交通を考えると、作業が失敗する可能性もある。

松原委員：エリアは大事である。まちなかのにぎわい創出とは、全体のマスタープランを考えて、色々な機能を持って来て、色々な人が住む、これがコンパクトシティの一つの方法ではあるが、住民サービスを考えないと人は増えない。

市民部長：小学校区単位の状況をまとめたものが指標になると思う。市の総合計画では多極分散型のまちづくりをうたっている。その中で、特に下田地域とまちなかと言われる旧三条小学校区は人口減少が著しく、また高齢化率が高い。御意見のとおり、ここだけ良くなるだけで良いのかということもある。三条市全体のそれぞれの地域の中で、このまちなかはどうなっているのかが分かるように調査を進めていきたい。

藤井委員：小学校区と言うと、嵐南小学校は一つであるが、四日町、本成寺、桜木町では若干違う感じがするので、特長を見逃す危険性がある。

井上委員：調査は3年に1回行うとあるが、重要と思うのは、自分の住んでいる所に愛着を感じるのか、人との繋がりが増えたかどうかなど、ソーシャルキャピタルの観点を指標に入れたらどうか。

小林委員：6・7ページについて御意見等をお願いしたい。

長野委員：えんがわは、最初、地域に元々あるものを掘り起こしたイベントを行った。これは、地域の人が喜ぶ、地域の興味を引き付けることで来てほしいという意図があった。現在はアンケートを行い、車で来たか、子どもと来たかなど、えんがわが今後どう動いていったらいいのかりサーチしている。買い物の動線なども調べ出したところである。動線を調べて、それが長ければ椅子を置く、置けば座るのかなど、にぎわいの創出をどういう形で進めていくのかといった取組を始めたところである。

小林委員：この他に、現地調査で調べてほしいというものがあれば発言願いたい。

川口委員：えんがわの調査は、規模は小さいかもしれないがすごく大事なことだと思う。来ている人の年齢やタイプが違うわけだが、何を目的にして、何を求めているのかヒントにしなければならない。また、鍛冶道場も少し違う使われ方として、技術にすごく興味があり遠くから来ている人もいるかもしれない。そういう人にも聞くと良いと思う。リサーチによって、来る人の目的を把握することで使われ方も変わってくると思う。

長谷川委員：鍛冶道場の調査はしていないが、圧倒的に県外客が多い。連休には体験者数が300人程度で、平均にすると1日30人になる。また、カーナビでは、県外の人を探しきれない。サインが必要である。

川口委員：繋ごうとしている施設である中央公民館や八幡公園など、どのような使われ方をしているのか分かってくると良いと思う。

小林委員：8ページについて確認願いたい。

井上委員：空き家に若い人たちが入居したくなるようなまちになると良いと思う。そこで子どもが生まれるような都合の良いことがあるかどうか分からないが、よりハッピーになる。また、東京の人からすると、住宅事情から空き家と聞いただけで羨ましいと思う。リフォームなどで、移住するようなまちになると良い。これは強みではないか。

市民部長：弱みと言えば弱みであるが、少子高齢化の象徴的な活用として、資産の増加という観点から見れば強みにもなる。

井上委員：若い世代が空き家を買って、住んでもらうにはどうしたら良いのか、ブレインストーミング等でもっと具体的になるのではないかと思う。十日町市に外国人が古民家再生に頑張っている。

川口委員：商店街の衰退は、新陳代謝していない所であり、オーナーがそのまま高齢化し、商売意欲がない跡継ぎで衰退していく。若い世代に安い家賃で人が集まるような状況が作れると若い感覚を持って活動する可能性がある。仕掛けを作れば、空き家・空き店舗はむしろプラスの要素とを感じる。

井上委員：子どもがいる若い世代がどこかに住むとしたら、まちなかではなく場所を選んで住むわけで、何か利便性が良いとか、子育てしやすいとかの理由がある。それは空き家と競って負けているわけだが、何かのやりようで空き家のポテンシャルが上がり、空き家に来るようになるのではないか。

吉田委員：町内に空き家がいっぱいあるが、仏壇が置いてあるために人が入らない。

井上委員：こういう発言を引き出すことが重要であり、時間をかけて本音を聞くことが大事である。

松原委員：空き家・空き店舗を活用する施策は既にあるのではないか。

市民部長：空き家の状況は、期間限定であるが、水道を閉栓している家屋は1,000軒程度あり、そのうち住宅かどうかを見極めた上で、680軒程度を家屋の状況によってランク付けしている。状態の良いAランクの所有者に対しては、市の空き家バンク制度に登録してもらうよう依頼している。また、移住者を対象に補助制度を設けているが、実態としてはいきなり空き家を改修して住むより、まずは賃貸住宅に入り、三条はどのようなまちなのかを見てから空き家を買うという動きがある。三条に永住してもらえる施策をもっと考えなければならぬと痛感している。

結城委員：ビジネスチャンスのために、年間で30から50軒の空き家をチェックしている。空き家の現状は弱みだと感じるが、いずれ強みに変えられる。あと10年もすれば強みに変えられると思う。次世代に相続した物件は売買の成立が高いが、そうでない場合は低い。これは、双方の相場にギャップがあるため、相続した空き家の所有者は無償でも良いと思っている。高

齡の空き家の所有者が健在の場合は、活用は難しいと考えて良いと思う。  
また、仕事があるかどうか、アクセスが良いとかも要素である。

藤井委員：これは定性的分析でありよく分かるが、前回定量的な部分のファクトをお願いした。5ページがそれに当たるのかもしれないが、ファクトを示さない限りは、それに応じたプランもできないと考える。定性的、定量的な分析を加えることを提案する。

井上委員：空き家は、機会にも入ると思う。それ以外はこの案が良い。

小林委員：次に、9ページについて意見ををお願いしたい。

長野委員：先ほどの強みのところで、事業所の集積地とあるが、過去のものであると認識している。このエリアは、商売の特性で分業が多く、一人でやっている事業主が多く、北三条駅があって流通機能に役立っていた。強みで「事業所の集積地であった」ということを強く押し出すべきだと思う。

ものづくりでは、若い方々は様々な手法で取り組まれているが、その商売の手法をかつて事業所の集積地であったこのエリアの特長を活かしながら、新たな商売に取り組める仕組みづくりの中でコンテンツを多く生み出すこと。生業は必要であり、生業をもって子育て世代に来ていただくとか、空き家を利用していただく。えんがわでも、色々なイベントを実施するが、それ以外の本当のコンテンツとして、民間の力が大いに発揮でき、様々な世代でにぎわっていくことで高齢者の方も感じ取って出掛ける機会も増えると思う。生業創出のコンテンツを作り出すことが必要と思う。

小林委員：「まち工場や職人に焦点を当て」と書いてあることについてどう思うか。

長野委員：事業所の集積地であったが、現状はまち工場をここに持ってくることは不可能である。職人を増やすことについては、興味のある若い世代がかつて工場であった所や空き家に移住することを市に考えてもらえれば良いと思う。空き家等の改修費用は多額になる。市の支援内容によって可能性はあると思う。

結城委員：住宅は難しいと思うが、シェアオフィスなどの機能だけならコストを抑えた改修方法もあると思う。住宅にするのであれば工業団地とまちなかを結ぶ交通網があれば、海外からの労働者専用の社員寮はどうか。

長谷川委員：ものづくり大学が出来る。空き家を利用して学生の住まいも考えられる。それには足を確保しなければならないが、北三条から一駅である。

小林委員：鍛冶町に工場の祭典のエッセンスを取り入れたような昔の工場の再現は可能と思うか。

川口委員：工場の祭典は全国的に有名である。元々あった文化とか、かつての仕事を活かすことはまちおこしのキーとなる。鍛冶町のどこかで鍛冶をやっている感じがあれば歩きたくなる。若い学生などの興味を引くエッセンスを磨いた取組ができれば可能と思う。

小林委員：かつての鍛冶町の再生は、それらの取組を繋げていけば可能か。

川口委員：一つ二つあれば自然と周りが意識し、勝手につながっていくと思う。

小林委員：10・11 ページについてお願いしたい。

藤井委員：図書館の駐車場と歩かせるまちづくりは、どうしても相反する。路線バスの的なものは考えているのか。

隈研吾建築都市設計事務所：大型バスの展開路とか、そういったものは想定していない。現実的には北側のえんがわの屋外広場が良いのではないかというイメージを持っている。

藤井委員：冬場のバス停を考えると、あえて図書館前のプロムナードに優先的にバスだけを入れる。バスは待つことが前提である。スマートウエルネスの歩かせることと駐車場のバランスをどうとるかは非常に難しいと思う。弥彦線の利用者は若い人が多くなっている。これは燕三条駅付近でない映画が見れないためだが、若い人はこの方面に行っている可能性もある。北三条駅で降りる何かが必要。また、歩くことについては除雪で道路が傷む。逆手にとって赤錆色の道路はどうかなどあるが、現実を考えると難しい。その中で出来ることは何かを考える。

吉田委員：各家庭にプランターを置き、町内で灌水するという考えでいる。水をやることによって、隣り近所の会話が増える。えんがわに協力してもらい外出の機会を増やせば、男性の方が元気になってくる。そうすれば、例えば男性は鍛冶道場に行って包丁研ぎ、女性はグループでお茶のみ場が出来てくるのではないか。今年は、町内の全世帯に花をやって、育てるのは各家庭、一人暮らしの方には協力して水をやるなどチームワークを組んで元気にやっていきたい。

高橋委員：にぎわいとは人が住むことなのか、人がたくさんいることなのか、どちらをにぎわいと捉えるのかを考えた時に、商店街は人が住んでいたそこで商売をしていた。昼間は人が居て、夜も人口があった。事業ができなくなって外へ出て行き、高齢化等で事業が出来なくなった方もおられるわけで、経済活動が活発化しないとにぎわいには繋がらないと思う。仕事があればここに住むメリットがない。図書館周辺にオフィス環境等を整備できれば、人口も増え、経済活動も活発化しにぎわうことになる。最終的には子育て世代で、これから家を建てようという人は学校の近くに建てると思うので、これに勝つコンテンツを揃えていかないといけないと思う。

松原委員：外から人が来て交流するためには、公共交通が重要であるが、大半は車で来ると思うので、アクセスする計画を作る。また、このエリアを駐車場から歩く地区交通計画、交通規制、車や自転車を含めた仕切りが必要である。もう一つは道をきれいにしても歩かない。沿道の見せ方が重要だと思う。

○閉会